日本におけるレズビアン・フェミニズムの活動
——1970年代後半の黎明期における——

杉 浦 郁 子

1　はじめに

1．1　関心の所在

本稿は、戦後、日本のレズビアン／バイセクシュアル女性たち（以下「レズビアン」）によってなされた活動を記録し、その活動を可能にした背景を分析する歴史記述である。

レズビアンの戦後の活動をまとめ、検討を加える試みは、もちろん本稿が初めてではない。筆者が確認しているだけでも、広沢（1987）、渡辺（1990）、葉月（1994）、敦賀（1995）、富岡（1996）、Ishino and Wakabayashi（1996）、出雲ほか（1997）、Summerhawk, McMahill and McDonald（1998）、『anise』（2001）、大江ほか（2003）、杉浦（2005a）、堀江（2006）、飯野（2008）、Sawabe（2008）などがある。しかし、これらのいくつかは概略的であり、またいずれもレズビアンの集合的な活動が始まった70年代に関する情報は多くない。本稿が注目するのはその70年代である。

前掲の文献では、レズビアンによる最初の集合的な活動を、1971年に発足したレズビアン・サークル「若草の会」（東京）としている。筆者も現時点ではその見方にしたがうが、本稿が着目するのはその「若草の会」ではなく、70年代後半に入って東京で登場した一連の「レズビアン・フェミニズム」の活動である。それらの活動はどのようにして組織されたのか。組織化をうながした背景や要因は何か。これをできる限りくわしくたどり記述することが、ここでの目的である。

1.2　70年代後半のレズビアン・フェミニズムの活動

(1) 70年代後半に発行されたミニコミ3誌

1971年は、若草の会というレズビアン・サークルの活動が始まった年である。鈴木道子(1950-)が「仲間と出会いたい」という思いから設立し、約15年、続いた。その間、少なくとも500人以上が入会したと見積もられている（広沢 1987: 113)。会の活動は、会誌の発行、毎月の茶話会、年に1回の小旅行などで、会員同士の交流に力が注がれていた（福永 1982: 98)。鈴木が会の宣伝のためならマスメディアの露出を厭わなかったこともあり[1]、会の存在を知る者は全国に散らばっていたようである（福永 1982: 99)。

本稿が詳細に記述するのは、この若草の会ではなく、会のやり方に物足りなさを感じていた女性たち、「ウーマン・リブ」「女の運動」と接点のあった女性たちによる活動である。具体的には、70年代後半に発行されたミニコミ3誌、『レスビアンの女たちから全ての女たちにおくる雑誌　すばらしい女たち』(1976年11月、以下『すばらしい女たち』)、『ザ・ダイク』(1978年1月に第1号、6月に第2号)、『ひかりぐるま』(1978年4月に第1号、9月に第2号）である。

これらのミニコミ誌は、出会いを目的とした若草の会と異なり、レズビアンの「うちなるホモフォビア」を取り除こうとする意図を有していた。『すばらしい女たち』というタイトルには、こうした意図が端的に表現されている。「レズビアン」というカテゴリーの意味をプラスに転換することは、解放運動やコミュニティの形成の第一歩であり、したがって、一連のミニコミ誌は、日本のレズビアン・コミュニティの歴史を画す、特筆すべき活動である。

(2) レズビアン・フェミニズムの思想と実践

ところで、これらの3誌を「レズビアン・フェミニズム」の活動と括るためには、若干の検討と留保が必要であろう。

レズビアン・フェミニズムは、1970年代から80年代にかけてアメリカで発

展したもので、思想的にはラディカル・フェミニズムの一派である（富岡 1997: 66; Tuttle, 渡辺訳 1991: 209)。それは「女性同士のエロチックな／感情的な関わり合いと家父長的支配への政治的抵抗とは関連している、という想定にもとづいた様々な信念や実践」(Taylor and Rupp 1993: 33）だと大まかに定義することができる。

レズビアン・フェミニズムは、「異性愛」を家父長的支配の「制度」と見なし、さらに「女性同士の関係性（レズビアニズム)」を男性支配転覆の「手段」と見なす。これを象徴するスローガンが「フェミニズムは理論であり、レズビアニズムはその実践だ」である（Taylor and Rupp 1993: 44-45)。レズビアニズムが単なる性的嗜好、すなわち「個人的な事柄」ではなく「政治的な行為」だと捉えられている点に、「個人的なことは政治的なこと」と看破したラディカル・フェミニズムの影響を見てとれるだろう。女性（レズビアンを含めた）の抑圧の根源は「制度としての異性愛」にあると考え、その制度を転覆させる手段としての可能性がレズビアニズムに託されているのである[2]。

ラディカル・フェミニズムの思想的枠組みのなかでレズビアニズムが解釈されたこと、レズビアン・アイデンティティが性的なものから政治的なものに転換されたことで（Taylor and Whitter 1992: 117)、70年代のアメリカの活動家たちのなかには「レズビアン」というアイデンティティを選択し、レズビアン・フェミニズムを実践する者も出てくるようになった。アメリカの女性運動において、レズビアンは、フェミニストとして評価されることで受け入れられたのである。

(3) ミニコミ3誌におけるレズビアン・フェミニズム

日本では、アメリカのように、レズビアン・フェミニズムに関する議論が「活発に」なされたことはない。思想にもとづいた実践がアメリカほど「本格的に」あるいは「厳格に」なされたこともない。しかし、本稿では、先に挙げたミニコミ3誌をレズビアン・フェミニズムの活動だと括る。

それは、３章で述べるとおり、ミニコミ誌を編集した女性たちが、レズビアン・フェミニズムの思想にふれることで問題意識を育てたり、自らの抱えている問題を解決したりした経験を共有していると思われるからである。もちろん、３誌にはレズビアン・フェミニズム的な思想―たとえば「女性を愛すること」の意味を「女である自分を肯定すること」に求めたり、異性愛という制度を、同性愛を排除するものとしてというより、女性を役割のなかに押し込め不自由を強いるものとして問題にしたりする主張―が散見される。３誌を「レズビアン・フェミニズムの活動」と捉えるのは、しかしながら、作り手にその思想が共有されているからではなく、思想の一部を引いて「レズビアンである自分」を受容した経験が共有されているから、という理由による[3]。

むろん、ミニコミ誌の制作に関わった女性たちがレズビアン・フェミニストだったから、という理由でもない。彼女たちのなかに、レズビアン・フェミニストというアイデンティティをもつ人がどれくらいいたのかはわからない。また、少なくとも３誌の制作を主導したのは「フェミニズムの実践のためにレズビアンになることを選択した」という女性たちではなかった。この点についても３章で示す。

３誌を「レズビアン・フェミニズムの活動」と見なすことの妥当性は、別途、検討されるべきだが、本稿では、３誌を連続性のある活動として取り上げ、「レズビアン・フェミニズム」という補助線を入れることで、日本のコミュニティ史の特徴を浮き彫りにしやすくなるのではないかという予測のもと、一括りにした。そのうえで、とりわけ最初に発行された『すばらしい女たち』がどのようなプロセスを経て誕生したのかを記述することや、誕生の背景や契機は何だったのかを分析することに、まずは焦点をしぼりたい。

１．３　資料

以上の目的のために活用する資料として、まずドキュメント（書かれたもの）がある。ミニコミ３誌および雑誌に掲載された文章に加え、冒頭で挙げ

たような、後年になって当時のことを振り返った歴史記述も参照する。ドキュメントは、そのほとんどを図書館で入手できたが、ミニコミ３誌は、制作に携わった方々が個人で所蔵していたものを複写させてもらった[4]。

さらに口述史を用いる。2007年10月から2008年８月にかけて、70年代、80年代の活動に関わった７名の方に、当時の話をくわしく伺うことができた。彼女たちの語りを整理し、文章にした口述史[5]を引用する。それらは、本稿の歴史記述に厚みと説得力を加える、重要な史料である。

もちろん、ドキュメントも口述史も収集の途上であり、とくに口述史の件数が不足している。しかし、それでもいくつかの新しい知見を示すことができると考えている[6]。

２　レズビアン・フェミニズムの活動の前史

本稿が注目する70年代後半のレズビアン・フェミニズムの活動は、それ以前の状況に連なるものであり、その状況を変えようとして登場したものである。したがって、本章では、60年代後半から70年代前半にレズビアンを取り巻いていた状況がどのようなものであったのか、また、彼女たちがどのような活動に参加し、そこでどのような経験をしていたのかをたどってみたい。

２．１　一般の「レズビアン」イメージ：1960年代後半以降

最初に、「レズビアン」という概念に対する当時の世間のイメージを確認しよう[7]。管見では、戦後の大衆娯楽雑誌[8]で「レズビアン」の語を初めて用いたのは、「東京同性愛地帯のインテリ女性たち：バラ十字会のメンバー２人の告白から」（『週刊現代』1963年８月１日号、86-89）という記事である。そこには大きく２つの「レズビアン」イメージを見て取れる。１つは「レズビアン・バーの男装店員」のイメージ、もう１つは「性的に奔放である」というイメージである[9]。60年代後半から70年代にかけての「レズビアン」イメージは、「男装（異性化）」と「性的（ポルノ）」の２つが並存していた（杉浦 2005b, 2006; Sugiura 2006）[10]。

（1）「性的」というイメージ

「性的」というイメージの普及に一役買ってしまった人物に、性医学者の奈良林祥（1919-2002）がいる。奈良林は、1964年から65年の１年間、アメリカで女性同性愛に関する研究に従事し、帰国後『レズビアン・ラブ』（1967）という本を出版した。これを皮切りにその後の５年間で、レズビアンに関する本が複数、出版された（秋山 1968; 清岡 1968; 岡崎 1969; 杉原 1970; 清岡 1971）。

これらの本には「レズビアン・テクニック」の解説や言及があり、それを「男性とのセックスとは比べ物にならない快楽を女性にもたらす特別な技巧である」と価値づけている。この認識は、60年代後半以降、大衆娯楽雑誌にもあふれ出し反復されたが、男性誌の「レズビアン」に関する記事の多くは、実質、「特別な技巧」を用いた「レズビアン」の過激な性行為を赤裸々に描写する「ポルノ」であった（杉浦 2005b）。

「性的」というイメージがいかに一般に浸透していたのかを示すエピソードがある。1974年と75年にリブ新宿センター（リブセン）に頻繁に通い、のちにレズビアン・フェミニズムの活動に参加した沢部ひとみは、そこでの出来事をこう述懐している。

> リブセンでは最初からカムアウトしていました。田中［美津］さんはびっくりしたような顔をして「パンダを見るような目で見て、ごめんなさい」って話しかけてきた。それから「レズビアンというのはポルノの一つだと思っていた」というようなことを私に言った。まあ、ある意味、正直だよね。あの時期のウーマンリブのリーダーであった彼女でさえ、レズビアンに対してポルノというイメージを持っていたのだから。どれだけ当時、レズビアンのイメージが強くポルノと結びついていたかが、よくわかるじゃない。（沢部 2009: 44）[11]

1970年にリブに出会い、1975年に初めて女性を好きになったことでレズビアン・アイデンティティを獲得したという若林も、それ以前は「レズビアン

＝ポルノ」というマイナス・イメージが染み込んでいたと語っている。

> 私は、アメリカに行く前、（中略）女性を好きになったこともなかったし、当然、レズビアンだというアイデンティティはない。むしろ偏見をもっていたと思うね。（中略）女同士のセックス・シーンが出てくる映画をたまたま［近くの映画館で］やっていた。私は別にそれを観たくて入ったわけじゃなかったんだけど、三本立ての一本で観てしまって、その映画がすごく気分が悪かったの。（中略）まぁ、後から考えたら、男がつくるポルノ映画で、男たちを性的に刺激して喜ばせるために作っているものだったんだけどね。たまたまそういうのを観てしまって、レズビアンにマイナスのイメージをもっていました。（若林 2009: 23）

（2）「男装」のイメージ

今ひとつ、「レズビアン」と結びついていたのは、「レズ（ス）・バー」にいる男装者のイメージである。1960年代の東京には、多くのレズビアン・バーが存在したという。寺山修司の率いた劇団「天井桟敷」による「レズ」をモチーフとした男装劇『星の王子さま』（1968）には、レズビアン・バーが協賛として名を連ねていたといい、その数は23軒に上ったという話もある（芝 1993: 290-1）。

当時の「レズ・バー」は、男装をした女性がバーテンやボーイ、ホストをし、一般の女性客や男性客にサービスをする店であった（清岡 1968: 113）。1970年代後半には、すでに下火になっていた（芝 1997: 111）とのことだから、この形式の「レズ・バー」に勢いがあったのは、60年代後半からの10年間ほどだったと推測される。いずれにしても、この時期「レズビアン」は、男装の女性をイメージさせる言葉だったということである。

また、テレビ番組に「レズビアン」として登場していたのは、もっぱら男装した女性だったようである。1978年に関西から上京し、女の運動に参加した神楽じゃむは、高校生だった1970年前後のことを、次のように振り返っている。

高校のときにはもう、「レズビアン」がばんばんテレビに出てましたよ。サングラスをかけて出てきて、男装で。テレビに出るレズビアンと言えば、あのタイプでしたよね。みんな「レズ」っていう言葉を知っていたし、私もそういうのを見て「なんか嫌だな」と思いましたよね。だから「自分ももしかしたらレズビアンかも」なんて、簡単には受け入れられないですよね。 (神楽 2009: 67)

また、1974年に「レズビアン・バー」として知られた「青い部屋」でアルバイトをしたことのある沢部は、そのときの経験を次のように語っている。

「青い部屋」の薄暗い明かりのなかで妖しくうごめく人たち。いつも下ネタしか話さないような人たちと〔アメリカで出会ったレズビアンと〕は大違いだった。今になれば、そこには自分のホモフォビアが投影されてたし、彼女たちはお金を稼ぐためにそうしていたんだとわかるけど、当時の私には彼女たちと自分が同じとはとても考えられなかった。 (沢部 2009: 43)

70年代前半にレズビアンの肯定的なアイデンティティの獲得を阻害していたのは、「性的」および「異性化」というイメージだったのである。

2.2 リブのなかのレズビアン：1970年代前半

後述するが、1976年に『すばらしい女たち』を発行するために動き出した女性たちは、リブ新宿センターで出会っている。リブ新宿センターは、東京の代々木に1972年9月30日に開所したウーマン・リブの拠点である（リブ新宿センター資料保存会 2008: ii)。アメリカの女性運動でレズビアン・フェミニズムが台頭してきた1970年代前半、日本のリブにおけるレズビアニズムの位置づけは、どのようなものだったのだろうか。手元にある資料から時系列で探ってみたい。

『すばらしい女たち』の制作に携わった麻川まり子は、1970年10月21日の国際反戦デーに行われた女だけのデモをきっかけに「ぐるーぷ・闘うおんな」[12]に参加し、しばらく女性たちと共同生活をしていた。しかし、初めてのリブ合宿（1971年8月21-24日）の1ヶ月ほど前に、「ぐるーぷ・闘うおんな」をやめたという。その理由の1つとして、次のようなエピソードを語っている。

私は、そのとき自分はレズビアンだと知っていたし、それを言っていたんですね。「私はレズビアンで、女が好きだ」って。でも、そこで一緒に暮らしていた人たちに対しては、恋愛感情は何もなかったし、ただ、いい仲間だと思っていた。（中略）だけど、あるときあとで一緒に『すばらしい女たち』を作った人で、親しくしていた人から、「ちょっと話がある」と喫茶店に呼ばれて、「みんな、あなたの側で寝るの、嫌だって言ってるよ」と言われた。「え、そんな」「私だって好みがあるし、好きな人を選びますけど」と思って。それも大きな理由ですね、「もう嫌だ」「ここに居たくない」と思ったのは。私は、それまで「仲間だ」「同志だ」と思っていて、愛情があったわけですよ。同志愛をもっていた、それが壊れた、と感じたんですね。 (麻川 2009: 5-6)

麻川とともに『すばらしい女たち』を作り、次いで『ザ・ダイク』の制作にも参加した織田道子は、その創刊号（1978年1月）において、「自分が女を性愛を含めて好きなのだと、世間様にはもちろん友人にも、女性差別の闘いをしている女たちにさえ語ることの許されないタブーだった」（織田 1978: 3）と書いている。「7年前」、つまり1971年頃にリブの女たちに「女性が好きだ」と告げたときの否定的な反応を具体的に挙げ、当時のリブにレズビアン差別があったと訴えている。

また、織田は、リブ新宿センターに関わった女性たちが集まり1996年に行われた座談会で、若林とともに当時のことを振り返っている。この座談会で、若林も織田も、リブ新宿センターではレズビアニズムが顧みられることはなかったと指摘している。

若林　私はアメリカに行ってレズビアンになったんですが、性の関係というのは同性同士もあるし異性の関係もあるんだけど、そういうことが自分のなかに意識としてなかったのね。また、リブセンターのなかにもなかった。重要なことだと思うんですよね。

織田　すごく重要よ。私がリブセンに入れなかった理由としてそれが大きいもの。

若林　私自身、そのころはむしろレズビアンに対して偏見を持ってましたから……。(略)

織田　当初のリブの運動は、男なしで生きられないという社会のシッポを引きずっていた。セックスというとやっぱり男、という話になって、私が違うと言っても「あなたも男が好きなはずだ」という話になってしまう。

(遠藤ほか 1996: 221)

リブの活動家が編集を担当していた『女・エロス』(1973-1982) の創刊号には、吉廣紀代子が第1回国際フェミニスト企画会議(米マサチューセッツ、全米婦人機構主催、1973年6月) に参加したときのレポートが掲載されている。吉廣は、レズビアンの分科会がとくに盛況だったことや、リブとレズビアンの運動が一体で進められていることに驚き、「アメリカの運動を報告する時、レズビアンはすでに避けて通れなくなっている問題のように思う」「今後のアメリカのウーマン・リブ運動のひとつの鍵を握っているといっても過言ではない」(吉廣 1973: 106) とレズビアニズムの問題を中心に記事を構成している。しかし、それは、あくまで海の向こうの出来事として報告されるのみである。

このようなアメリカの状況は、情報としては入ってきていた。若林は、リブ新宿センターに「レズビアンの資料がずいぶん来」たと話しているし (若林 2009: 23)、前述の座談会でも次のように語っている。

若林　リブセンには欧米、特にアメリカからたくさんのリブの人たちが訪ねてきていて、ある人がレズビアンのテープをくれたのね。それに "Any woman can be a lesbian." すべての女はレズビアンになれるというのが入っていて、それをみんなで歌いながらお掃除とかしてたんですよね。だからインフォメーションとしては入ってはきてたんですよ。

(遠藤ほか 1996: 221)

沢部もリブ新宿センターで、アメリカの女性解放のための全国紙『オフ・アワ・バックス (off our backs)』を読み、アメリカのレズビアン・フェミニズムにふれたという (沢部 2009: 40)。また、海外からセンターに送られてくる資料を翻訳するグループも1974年3月には発足している (リブ新宿センター資料保存会 2008: iv)。

天野道美は、『女・エロス』の第2号と第3号で、「アメリカのレズ論」として『Our Bodies, Ourselves』[13]の翻訳を掲載している (天野 1974a, 1974b)。第4号 (1975) では、ニューヨークの滞在記を載せているが、そこで天野は、リブのなかでレズビアニズムを取り上げるつもりはないと述べている。

レズビアンの問題も西洋と東洋とではまるっきり状況が違う。シャーリーが行く先々で私のことを日本のリブでただ1人のオープンなレズビアンだと紹介してくれて、みんなにとてもよくしてもらい、期待もされたけれど、私は日本でレズビアニズムをリブとしてとりあげる気は全くないし、ここでも省く。

(天野 1975: 147)

「日本のリブでただ1人のオープンなレズビアン」というフレーズも、当時の状況を伝えているだろう。

リブ新宿センターが発行していたリブニュース『この道ひとすじ』(1972-1976、全18号) では、第14号 (1974年11月23日) に唯一、レズビアンを取り上げた記事が掲載されている。『黎彗毘闇 (れすびあん) 女と女が抱き合うとき〈談〉彗・毘』という、2人の会話をまとめた記事である (リブ新宿センター資料保存会 2008: 171)。そこには「アメリカのリブの運動の中で、レズビアンの占める割合がとても大きいっていうのは、日本じゃとても考えら

れない」との談話が残されている。

以上をまとめよう。日本のリブが開花した1970年当初から、運動のなかにレズビアンはいたし、そのことを他の女性たちも知っていた。しかし1971年、72年という運動の初期の段階では、レズビアンに対する嫌悪感が隠されることはなかった。また遅くとも1973年には、アメリカのレズビアン・フェミニズムの情報は、日本のリブに入ってきていた。しかしそれは、リブの女性たちに自らのジェンダー／セクシュアリティを省察させたり、レズビアニズムという課題を取り上げる必要を確認させたりする材料にはならなかったようだ。女性への性愛を自覚していた女性たちも、それをリブに積極的に求めてはいない。織田道子（遠藤ほか 1996: 221）が指摘しているように、少なくとも1970年代前半までの日本のリブは、男性との関係における「女」の意味を書き換えることに専心していたのであり、女性同士の関係のなかでジェンダーを再定義する可能性は見落とされていた。

2.3 「若草の会」に対する評価

「若草の会」は、1971年12月から活動を始めたレズビアン・サークルである（広沢 1987: 111）。女性への性愛を自覚しつつリブに関わっていた人で、若草の会に行ったことのない人は少なかったようである。では、のちに『すばらしい女たち』を制作した女性たちは、この会をどのように評価していたのだろうか。

まず、会に行ったことのある人たちは皆、出会いの場としての会の存在意義を認めている。『すばらしい女たち』に掲載された座談会（1976年4月17日）では、「Wの会」として若草の会を話題にしているが、「全員レズビアンで、そしてレズビアンの人があれだけたくさん集まっているっていうのはすごいすばらしい」（「すばらしい女たち」編集グループ 1976a: 15）という発言が最初にある。「相手がほしいっていうのは理屈抜きにある」（前掲書：16）し、「自分と同じ想いの人がいるということを知りたい」（前掲書：16-17）、「話だけでもしたい」（前掲書：16）という人もいる、若草の会ではそれができる

のだと評価している。

他方、批判も向けている。若草の会は不定期で会報を出しており、そこには会員のプロフィールや交際を希望する人のメッセージが掲載されていた。さらに、プロフィール、メッセージを出した人の特徴が、会長ないしは会の判断として、名前の上に記入されていたという（福永 1982: 88-89）。その特徴は、次のように類型化された記号で表現されていた。「外見女性的（内面リードされる）」「外見女性的（内面リードする）」「外見女性的（内面相手により違う）」「外見男性的（男装）」「外見ボーイッシュ（内面リードする）」「外見ボーイッシュ（内面相手により違う）」「外見普通（内面相手により違う）」「外見普通（内面リードする）」（福永 1982: 28）の８つである。

『すばらしい女たち』の座談会でも、若草の会において、誰がどのタイプかの見極めが重視されていたことを伝えるエピソードが披露されている。

> 私がはじめて行ったときはね、わたしは女役だと思われたわけ（一同爆笑）、笑うなよな、ほんとだもん。（中略）それで、役っていう問題すごく大きいんだけどさ、すごく無言の強制がある。正座していると「わあ、あなた女らしい」とかいわれたわけね。で、アグラかいてみてもさ、最初にそうみられた偏見てのはなかなかとれなくて。今はもう全然ちがうけどね。
>
> （「すばらしい女たち」編集グループ 1976a: 15-16）

外見やふるまいが「男らしいか／女らしいか」、関係性のなかで「リードするほうか／リードされるほうか」という基準でレズビアンを分類し、恋人探しの手がかりとして提示するというのは、レズビアンが男女の関係を模した固定的な役割関係を築くと想定してのことである。こうした想定にもっとも批判が集中したという（広沢 1987: 115）。麻川もリブに関わっていたレズビアンから若草の会への批判はあったとして、次のように述べている。

> そういうのは、リブの理想に燃えていた私たちとしては（笑）、「ちょっとおかし

いんじゃない」となるわけですよ。リブですから、男と女の役割というのを否定していた。「同じ立場にいなきゃいけない」「タチネコになると力関係がある」「片方が男のように相手に指図したりするのは、いけないんじゃないの」と頭で思っていた。「男らしさ」「女らしさ」とか、ロールプレーをやっているとかいうのは、ウーマン・リブではバッテンなわけですよ。（麻川 2009: 11）

もうひとつ、「若草の会」に対する不満があったとするならば、それは会員同士の結びつきが希薄だったことだと思われる。『すばらしい女たち』の座談会では、「つながりたいと思えること」もあるのに会員同士でつながりをもてない物足りなさが語られており、また、つながるために「三々五々雑談してるんじゃなくて、みんなでひとつの話題について話し合いましょう、と提起した」（「すばらしい女たち」編集グループ1976a: 16）が、結局、果たされなかったという話が紹介されている。『すばらしい女たち』の岩田由美の文章には、若草の会に対する次のような評価が綴られている。

会合に出席して気づいたことは、街を歩いていても男としかみえない男装をした男のような女や結婚している家庭の主婦が多く、そこに集まった人はレズビアンという一つの共通点は持っていても、思考も状況も個々人によって全く違うということである。数回会合に出席したがなかなか友達を見つけられなかった。隣に座った人同志の個人的な話ししか行なわれず、出席した人全体の結びつきがなかった。（岩田 1976: 34）[14]

3 『すばらしい女たち』（1976）の発行

3．1 『すばらしい女たち』が目指したもの

『すばらしい女たち』は、リブ新宿センターのなかにできた「『すばらしい女たち』編集グループ」により1976年11月に発行された。麻川まり子、織田道子、田部井京子ともう１人の女性[15]が「レズビアンに関するアンケート」を作成、実施したことが発行への道筋を準備した。

アンケートを行った４人は、リブ新宿センターで出会ったという。麻川は、「レズビアンのグループを作りたい」（麻川 2009: 7）と皆で相談したとき、前章で取り上げた３つの領域における状況、すなわち世間におけるレズビアンのステレオタイプ、リブにおけるレズビアンの無視、若草の会における女の問題への無関心を問題にしていたと述べている。

リブセンターの他の人たちはその頃みんなストレートだったし、レズビアンに対する理解はあまりなかった。世間でも、レズビアンと言ったらストリップ劇場のレズビアンショーのイメージしかないようなかんじ。あと、六本木のほうにはレズビアンバーがあったんだけど、（中略）そういうところのレズビアンは「さらしを巻いて」みたいな先入観があった。それから、横浜で「若草の会」というのをやっていて、田部井さんと織田さんが行っていた。私も一度、連れて行ってもらったことがあったんですけど、でも当時の私たちは「若草の会は女の問題を社会問題として考えるようなことはしてない」「やっぱり女の問題を考えるようなレズビアンのグループを作りたいよね」って。（麻川 2009: 7）

換言すれば、「ボルノ」でもなく「男装」でもない別のレズビアンを提示し、さらにリブのレズビアン理解をうながし、かつレズビアンの「女の問題」理解をもうながすような活動を志したということである。

そうした志向が『すばらしい女たち』に体系的に示されているとは言えないし、続く『ザ・ダイク』や『ひかりぐるま』ほどに洗練された表現が見られるわけでもない。しかし、『すばらしい女たち』を読むと、それまで「世間」「リブ」「若草の会」にばらばらに投げ出されていたレズビアンたちが、レズビアン・フェミニズムにふれそれぞれの疎外を克服したという経験を共有し、結びついたことがうかがえる。

たとえば、田部井の「わたしが歩いてきた道」という文章では、「女性解放、同性愛者解放をこころざす女性同性愛者（英語でレズビアン＝フェミニスト）と知りあ」ったり、「同性愛に関する論文をいろいろ読んだり」した

ことで、「異常」という世間のレッテルから解放された経験が綴られている（田部井 1976: 48）。若草の会出身の岩田の文章は、「私の中のリブへの芽生え」を表現しており、リブの観点を取り入れて、ロールプレーをする若草の会のレズビアンを論評している（岩田 1976: 35）。リブ出身のかわはら狩戸の文章には、それまでのリブの前提を相対化する視線がある。「リブはイイ男に出会うために、自らがイイ女になる空間だと思ってて、イイ男に出会えない自分はイイ女ではないのだと、自分自身を自己肯定できなかった」（かわはら 1976: 54）という表現からは、女性同士の関係において「イイ女」になるという、レズビアニズムの可能性を見定めていることがわかる。

3.2　発行の経緯と背景

次に、『すばらしい女たち』の発行の経緯に注目し、発行を可能にした背景に迫りたい。

麻川によれば、「レズビアンに関するアンケート」は、リブ新宿センターの名簿に載っている女性たちに郵送したり、「女の集会」で手渡したりしたという。レズビアン向けアンケートに回答してきたのは57人、彼女たちに声をかけ、麻川のアパートで集まりをもった。来訪者は17人で、そのなかの11人が『すばらしい女たち』の編集に携わった（麻川 2009: 8）。

ということは、来訪者は、リブ新宿センターとつながりをもてる条件を有していた女性たちである。首都圏の匿名性のなかに身を置けたこと、親族からある程度の距離を保てたこと、そのために経済的に自立し得たこと、自立のための知識やスキルを獲得する機会をもてたこと等々、様々な条件が考えられるが、そのなかのいくつかを満たせた女性が麻川らの声かけに応じることができたのだろう。また、女性がそうした条件を備えられる時代になっていたということもあるだろう。「レズビアン」として生活を可能にした時代の条件は、確実に存在する[16]。

しかし、ここで注目したいのは、そのような広範な時代背景ではなく、リブとの連続性のなかで『すばらしい女たち』の発行が可能になったという、

より狭い範囲の背景である。その発行がリブ新宿センターの存在なくしては難しかったことは、発行に至るまでの経緯を知ればすぐに理解できる。

『すばらしい女たち』が発行されるためには、同じような関心をもつ者が出会える施設が必要であった。リブ新宿センターは住所を公表していたから、アメリカからレズビアン・フェミニズムの情報が送られてきたり、実際にアメリカのレズビアン・フェミニストが訪ねてきたりした。このことは、レズビアンというアイデンティティの受容や、女性同士の関係性の格上げのために重要だったと思われる。来訪した外国人は『すばらしい女たち』にも参加している。さらに、リブ新宿センターがリブニュース『この道ひとすじ』の定期購読者名簿をもっていたことによって、「レズビアンに関するアンケート」を多くの女性たちに配ることができた。座談会や編集作業には、リブ新宿センターが利用された。このようにリブ新宿センターは、レズビアンたちに物理的な活動スペースを提供しただけでなく、人、ネットワーク、情報などの資源も提供したのである。

しかし、前章で確認したとおり、1970年代前半のリブは、レズビアンの活動に無関心であり、そうした雰囲気のなかでレズビアンの課題を取り上げることは自ら抑制されていた。それを解いたのは、リブを牽引していた田中美津が日本を離れたことだったと、麻川は分析する。

> 七五年に田中美津さんがメキシコに行かれて、それからずっと帰ってこなかったでしょ。（中略）だから、その後でこの七六年（『すばらしい女たち』）が出てきたんだと思う。田中さんがいなくなって「自分たちで何かやらなきゃ」ということもあったし、「やりたいことをやる」という雰囲気になっていって、「レズビアンの雑誌を作ろう」ということになったんだと思いますね。だから『すばらしい女たち』は、誰かが中心になって作ったわけではないです。本当にみんなでけんかしながら作りました。（麻川 2009: 8-9）

70年代のリブを検証した西村光子は、田中美津がリブ新宿センターのなか

で「特別な存在」であったと述べ、田中とその他のメンバーたちの関係が「①指示―従属関係にあった、②それが恒常的・長期的なものであったことがうかがわれる」（西村 2006: 69）と指摘している。リブにおいて田中の影響力や存在感が突出していたのは明らかである。その田中の離脱が『すばらしい女たち』発行を後押しした、という麻川の分析には説得される。

また、田中が日本を離れたことをきっかけにリブ新宿センターの運営方式が変わったという。

> 彼女がいなくなってから、「リブセンターをどうしようか」ということになってね。「まぁ、続けよう」と。でも、もう住み込むのは止めて、みんなが等分に負担するということでローテーション制で運営していこうということになって、それで私もそのローテーションの一員として参加したの。（麻川 2009: 8）

運営方式の転換がリブ新宿センターの「雰囲気」を変え、新たな人員や問題意識を引き寄せた可能性も考えられる。いずれにせよ、リブの活動が沈静化し、女性運動が政府や行政の主導するものへと移行し始めた1975年頃に、レズビアンによる集合的かつ政治的な活動が誕生したのは偶然ではない。

3.3　リブにおけるレズビアンの顕在化

こうして『すばらしい女たち』が発行されたが、編集グループは「みんなあまりにけんかをしたので『もう一緒にやりたくないわ』というかんじになって」「小冊子を作り上げたとたんに解散した」という（麻川 2009: 10）。しかし、『すばらしい女たち』はリブの女たちの手に確実に渡り、読まれたようである。その編集に参加した出雲まろうは、次のように述べている。

> 出雲　全共闘、ウーマンリブという流れからきているおかげで、アンダーグラウンド文化とのつながりはありました。だからそれ［すばらしい女たち］を浸透させていく時も、アンダーグランドのネットワークでいろんな本屋に置いていました。本屋だけじゃないんだけど。（中略）リブ系の名古屋のウーマンズハウスや、京都のシャンバラ。モリモリとかひらひらという食堂、広島女の図書館、そういったところを通じて置いてもらった。だから主に、リブの手に渡っていったわけですね。反響はありました。残念ながらレズビアンの反響というよりはフェミニストからの反響のほうが大きかったですね。（中略）「すばらしい女たち」を読んだリブの中にも、レズビアンに関心を持つ人がかなり出てきました。
>
> （出雲ほか 1997: 60）

『すばらしい女たち』の発行を機に、リブのなかでレズビアンないしレズビアンの問題が見えるようになったは確かだろう。

また、その発行は、リブに関わっていた女性たちの自己意識を変化させたのではないかと思われる。神楽じゃむは、京都にあった女のスペース「シャンバラ」（1977年９月開店）で出会った女性たちのアイデンティティが、当初は曖昧であったと語っている。

> その頃、［シャンバラで］私の出会った人たちは、意外とレズビアンなんですよ。今や、ほとんどレズビアンになっているのかな。でも当時は「自分がレズビアンなのかわからない」と言う人が多かったの。かなりはっきり「自分は女が好き」と言っている子もいたけど、でもみんなわりと「女が好きだけど、まだわからない」と言っていたのね。その頃は、シャンバラなんかでも、そういうかんじだったのね。（神楽 2009: 69）

しかし、それから少しあとのシャンバラのミニコミ（『あんなあへ』５号、1978年12月）には、「自分の女への気持ち」に向き合い、「今私は、女を愛している。女と向かい合って、私は生まれ変わった。そして、今、私の行く手には女たちとの新しい可能性がある。女が女を愛するためにもっと自分を見つめてみたい。女である私がもっと、もっと素直に女を愛せるように女ひとりひとりと向かい合ってみたい」という思いを手にした、という文章がある

(木野 1978; 溝口ほか 1995に収録 : 381-2)。

レズビアンの顕在化により、自分のなかの「女性への愛」「女性との関係性」の質を吟味した「リブの女」は少なからずいたのだろう。その結果、レズビアンというアイデンティティを受容するに至った女性もいたかもしれない。

3.4 「政治的選択としてのレズビアン」の登場

また、「政治的な選択としてレズビアンになった」と公言する女性が登場したのは、日本では『すばらしい女たち』より後のことである。神楽は1978年の9月頃に上京し、「レズビアンを選択した」と言う女性と出会って驚いた経験を、次のように振り返る。

> 私は運動家タイプの人たちと付き合って行くことなるんですね。それこそリブ新宿センターなんかに出入りしていた人たちと。そういう人たちが「選択してレズビアンになる」という言葉を使っていたのね。「自分はレズビアンを選択する」って言い方をしていたと思います。「選択なんてこと、あるの？」って、初めはびっくりでしたね。「そういうのは、選択してなったりならなかったりするものか」って、ちょっと信じられなかったですね。私は、レズビアンというのは本当に小さい頃からそういうふうになっているものだと思っていたからね。(神楽 2009: 71)

77年から78年にかけて、「政治的選択としてのレズビアン」としてリブに関わる女性が少しずつ出てきた状況がうかがえる。

しかし、「政治的選択としてのレズビアン」が増えるにつれ、そうでないレズビアンとの対立も生まれたようだ。出雲は、『すばらしい女たち』に続くミニコミ誌『ザ・ダイク』(1978年1月に創刊) を発行したレズビアン・グループ「まいにち大工」が、1977年頃「政治的選択としてのレズビアン」たちと袂を分かった者により結成されたと語っている (出雲ほか 1997: 60-61)。

やはり「まいにち大工」に参加していた沢部も、それがリブと距離を置いたものであったと述べている。

> 『ザ・ダイク』は、『すばらしい女たち』に参加していた、若草の会の出身者たちが作った。リブの人たちとは一線を画しているよね。もちろんリブの考え方は入っているんだけど、それがあまり強くない、リブの人たちみたいに「政治的な選択」で「思想的に」レズビアンになったと言わないで、自分が性的にも同性が好きだからレズビアンだ、と言っていた。私は (文章を) 書いた覚えはないんだけど、その準備段階には参加している。 (沢部 2009: 46)

沢部はその後、意見の対立が原因で「まいにち大工」を離れたメンバーとともに「ひかりぐるま」というグループを結成、同名の機関誌『ひかりぐるま』(1978年4月に創刊) を発行することになった。ここでは『ザ・ダイク』や『ひかりぐるま』の内容に踏み込むことはしないが、ともにレズビアン・フェミニズムの思想の影響を受けた論考が掲載されていること、にもかかわらず、「政治的選択としてのレズビアン」が中心的な役割を果たしていたわけではなかったことを付言しておきたい。

加えて、1978年頃から、レズビアンの活動が女の運動のなかで間違いなく見えるようになっていたことを書き添えておこう。1978年1月28日に渋谷の山手教会で行われた女の集会では、「まいにち大工」がアピールを行っており、「これは、日本の女の運動の中で初めての、レズビアン・グループによる声明」だったと報告されている (田部井 1978: 12)。また、「まいにち大工」や「ひかりぐるま」の活動や機関誌の宣伝も、『女・エロス』や『あごら』といった女性運動の雑誌に掲載されている (まいにち大工 1978c, 1978d; ひかりぐるま 1978c)。

4 おわりに

本稿では、1970年代後半のレズビアン・フェミニズムの活動、とりわけその草分けの『すばらしい女たち』が発行された経緯を跡づけた。『すばらし

い女たち』は、一般社会における「レズビアン」ステレオタイプ、リブにおけるレズビアンの無視、既存のレズビアン・サークルにおける「女の問題」への無関心を問題にし、そうした状況に一石を投じようとするレズビアンたちによって製作された。

1970年代前半のウーマン・リブがレズビアンの問題に対する理解を欠いていたことは、第２章第２節で例証した通りである。しかし、リブ新宿センターは、レズビアンが利用できる資源を蓄えられる、おそらく日本で唯一の場であった。レズビアンたちがリブの資源を活用する機会は、リブを先導した田中美津が日本を離れたことで訪れたが、彼女たちはその機を確かに捉え、レズビアン・フェミニズムの集合的な活動へと結びつけたのである。その活動にとってリブは両義的だったが、そうだとしても、リブとレズビアン・フェミニズムの活動に連続性があることは疑いようもない。

『すばらしい女たち』を編集した女性たちは、その後、別々の活動へと分かれていき、新たなエネルギーを吸い寄せては、対立と分裂を繰り返す。これはどんな活動にも見られることなのだろうが、本稿では、そのプロセスまでくわしくたどれなかった。のちの展開については次稿を期したいが、いくつか仮説的なことを書き留めておきたい。

リブの勢いが落ち着いた時期にレズビアンないしレズビアン・フェミニズムに対する関心がリブのなかで高まったという事実と、それがその後のレズビアンの活動に与えた影響を分析していくことは重要だと考えている。日本のレズビアン解放運動の特徴を描くための１つの鍵ではないか。たとえば、『ザ・ダイク』や『ひかりぐるま』がリブから距離をとることができたことは、この事実と何か関係があるかもしれない。

また、レズビアン・フェミニズムは、「女であること」や「女性同士の関係性」を称揚するため、「おとこ性をもつレズビアン」や「ブッチ・フェムの関係を結ぶレズビアン」の排除へと向かうことがある。70年代後半のミニコミ誌もそうした効果をもったと思われる。つまり、レズビアン・フェミニズムをハブにしてつながったレズビアンもいれば、それによりつながりを絶

たれたレズビアンもいたはずだが、排除のベクトルについて、本稿では検証できなかった。これも今後の課題であるが、そのベクトルは、日本におけるレズビアン・フェミニズムの受容の深さや影響力と無関係ではありえないだろう。その「不徹底な」受容が、リブないしフェミニズムの論理に回収されないレズビアン存在を育んだ可能性は考えられないか。

いずれにせよ、70年代後半のミニコミ誌、続く「政治的選択としてのレズビアン」の活動が80年代にどのように橋渡しされていくのか、そのなかでレズビアン・フェミニズムはどのような機能を果たしていくのか、それはレズビアンがつながるために利用されながらどのような変形を被っていくのか、といったことを丹念にたどっていきたい。

謝辞

麻川まり子氏、神楽じゃむ氏、沢部ひとみ氏、若林苗子氏（50音順）に記して感謝いたします。口述史の作成にご協力くださり、貴重なミニコミ誌や写真などを提供してくださいました。どうもありがとうございました。

脚注

1 たとえば、1972年には、男性誌が若草の会を取り上げており、会長の鈴木の写真も掲載されている。「全国40マンの諸嬢よ‼『レズ友の会』会長23歳のこの恍惚」（『週刊大衆』1972年11月30日：142-144）、「『SEX 開拓者』を自負する女のメニュー：レズの全国組織化を狙う23歳の設計図」（『週刊サンケイ』1972年12月１日：132-135）などの記事である。鈴木を取材した広沢有美によれば、鈴木は会の存在を知らせるために「『お昼のワイドショー』や『トゥナイト』という夜の番組などにも出演した」（広沢 1987: 112）とのことである。

2 富岡明美は、アメリカのレズビアン・フェミニズム理論の「核を構成している概念」として、「女性愛」「強制異性愛」「制度としての性交」「政治的選択としてのレズビアニズム」の４つを挙げている（富岡 1997: 69-75）。「強制異性愛」と「制度としての性交」は、異性愛という制度が女性抑圧の根源であるという思想に関わる概念であり、「女性愛」と「政治的選択としてのレズビアニズム」は、異性愛という制度の転覆の手段に関わる概念であると整理することができるだろう。

3 この意味において、レズビアン・フェミニズムの活動は、70年代後半に限定されるものではない。80年代に入ってからなされた活動のなかにも、レズビアン・フェミニズムのそれと捉えられるものがある。

4 ただし、ミニコミ誌に掲載された記事の一部は、『資料日本ウーマン・リブ史』（溝

口ほか 1995）に再録されている。

5 インタビューのやりとりを書き起こし、文章に整理する作業は筆者が行った。インタビューに協力していただいた方々には、内容のチェックを２回お願いし、口述史として冊子で公表することや本稿で引用することについての許諾を得た。インタビューは、財団法人東海ジェンダー研究所からの助成を受けて行った。なお、本稿で引用するのは７名のうち、４名の口述史である。

6 本稿が1970年代前半の「若草の会」をとばして、70年代後半に照準しようとしているのは、それが重要な活動であるという積極的な理由だけでなく、「会」に関する資料収集が不十分であるという消極的な理由もある。首都圏で進行していた事態を中心に記述するのも、それ以外の地域の状況を把握するだけの資料が集まっていないためである。今後の課題としたい。

7 念のため付け加えれば、ここで概説するのは「(女性)同性愛」のイメージではなく、「レズビアン」のイメージである。1920年代から40年代にかけては「女性の同性愛は精神的なもので、肉体的な接触はともなわない」とする言説、また「精神的なものは一過性の同性愛であり、真性の同性愛は異性化を伴う」という言説が影響力をもっていた（赤枝 2004: 124-5)。しかし戦後、大衆娯楽的な本や雑誌という言説アリーナに登場した「レズ（ビアン)」は、当初からすでに、「真性＝性的＝男性的／一過性＝精神的＝女性的」という戦前の構図に合致しない存在である。

8 「大衆娯楽雑誌」は、性風俗に関する専門雑誌（性風俗雑誌）との区別において用いている。McLelland（2004: 5）によれば、性風俗雑誌に「レズビアン」の語が登場するのも1960年代だという。

9 実はもうひとつ、この記事から読み取れる「レズビアン」イメージがある。それは「インテリ」「ラディカル」というイメージである。「西洋からきた」「インテリ女性」などの見出しからは、高等教育を受け創造的な仕事をもつような「ラディカルな」女性が、保守的な性道徳から自由になり、女性との関係を楽しんでいるのだ、というイメージを受け取ることができる。「同性愛は文明度のバロメーターである」「文明度の高い国に多く、非文明国になるほどその数は減っていく」（清岡 1968: 88-89）などの言説、ベトナムでも裕福な人々の避暑地に存在したというルポ（清岡 1968: 63-81）などに見られるように、「レズビアン（女性同性愛）＝先進的」というイメージが、1960年代後半には作られていた。ライヒ（Wilhelm Reich）の『性革命』（第１版は1930年）が、1960年代の学生運動の季節に再評価され、学生や知識階層によく読まれたというが（邦訳は中尾 1969)、学生運動と性革命の影響を、この記事に見て取れなくもない。もっともライヒの影響については検証不足である。仮説として書き留めておいた。

10 大衆娯楽雑誌という言説アリーナに限れば、「性的」と「異性化」のイメージの並存は、80年代いっぱいまで続く。「レズビアン」から「異性化」イメージが完全に離脱するのは、性同一性障害の社会問題化がなされたあと（1995年以降）である（Sugiura 2006)。

11 麻川、神楽、沢部、若林の諸氏の引用は、インタビューをまとめた口述史からのものである。

12 田中美津（1943-）を中心に1970年10月に発足したウーマン・リブのグループ。

13 『Our Bodies, Ourselves』（The Boston Women's Health Book Collective 1973）は、『女のからだ：性と愛の真実』（秋山ほか訳 1974)、『からだ・私たち自身』（「からだ・私たち自身」日本語版翻訳グループ訳 1988）として翻訳が出版されている。しかし、『女・エロス』に訳出されたレズビアンに関する章は、1974年に発行された訳書では割愛されている。このような判断が働いたこと自体、リブにおけるレズビアンの位置づけを物語っている。

14 1987年に「若草の会」を取材した広沢有美のルポルタージュにも、同様の批判が紹介されている。「入れ替わり立ち替わり、いろんな人が出入りしたけど、結局横のつながりってものがなかったね。会員が会長と個人的につながっているだけで、その時、その場かぎりでサロン的に集まっては散るという感じだったから、友情が育たない」（広沢 1987: 119）とは、会に対する会員の評価である。

15 『すばらしい女たち別冊〈レズビアンに関するアンケート〉集計とレポート』によれば、「このアンケートは一年前に田部井と織田と麻川ともう一人の女で創られた」（1976b: 4)、「当初、四人でアンケートを作ろうとしていた」（1976b: 1）とあり、発行のきっかけを作った女性は４人だったことがうかがえる。

16 たとえば、D'Emilio（1983）は、「ゲイ／レズビアン」というカテゴリーを受容し、そのカテゴリーで自己を定義するようになった社会的条件を考察している。生産ユニットから愛情ユニットへという家族のあり方の変化、性の生殖からの分離、監視の厳しい農村から匿名性の高い都市への移動、収入の獲得による自立など、資本主義経済の成長は、人々に新しい生活の選択肢を与えた。こうしたマクロな条件が「レズビアン／ゲイ」としての自己定義や生活を可能にし、そのサブカルチャー、コミュニティ、ポリティクスを成立させたという事態は、日本にもある程度、あてはまると思われる。

引用文献

赤枝香奈子（2004）「女同士の親密な関係と二つの〈同性愛〉：明治末から大正期における女性のセクシュアリティの問題化」仲正昌樹編『差異化する正義』御茶の水書房、117-156。

秋山正美（1968）『レスビアンテクニック：女と女の性生活』第二書房。

麻川まり子（2009）「リブセンで出会った『すばらしい女たち』」杉浦郁子編『日本のレズビアン・コミュニティ：口述の運動史』1-16。

天野道美訳（1974a）「レズとよばれて（上）：アメリカのレズ論『Our Bodies, Ourselves』より」『女・エロス』2: 86-98。

天野道美訳（1974b）「レズとよばれて（下）：アメリカのレズ論『Our Bodies, Ourselves』より」『女・エロス』3: 80-92。

D'Emilio, John (1983), "Capitalism and Gay Identity," Snitow, Ann, Thompson, Sharon and Stansell, Christine (ed.), *Powers of Desire*. 風間孝訳（1997）「資本主義とゲイ・アイデンティティ」『レズビアン／ゲイ・スタディーズ』（『現代思想』臨時増刊号）25(6): 145-158。

遠藤美咲・織田道子・北山黎子・武田美由紀・生原玲子・町野美和・森節子・米津知子・若林苗子（1996）「座談会・リブセンをたぐり寄せてみる」女たちの現在（いま）を問う会編『全共闘からリブへ』インパクト出版会、204-251。

福永妙子（1982）『レズビアン：もうひとつの愛のかたち』大陸書房。

葉月いなほ（1994）「日本におけるレズビアンの歩み」『Human Sexuality』15: 73-76。

ひかりぐるま（1978a）『ひかりぐるま』創刊号。

ひかりぐるま（1978b）『ひかりぐるま』第２号。

ひかりぐるま（1978c）「ひかりぐるまアピール」『女・エロス』11: 165。

広沢有美（1987）『女を愛する女たちの物語：日本で初めて！ 234人の証言で綴るレズビアン・リポート』（別冊宝島64）JICC 出版局。
堀江有里（2006）「〈レズビアン・コミュニティ〉とそのあゆみ：日本における同性愛者の集合行動を中心に」『〈レズビアン・アイデンティティ〉の可能性：日本におけるレズビアン研究の構築に向けて』（2006年度　博士学位論文　大阪大学大学院）、69-92。
出雲まろう・原美奈子・つづらよしこ・落合くみ子（1997）「日本のレズビアン・ムーヴメント」『レズビアン／ゲイ・スタディーズ』（『現代思想』臨時増刊）25(6): 58-83。
飯野由里子（2008）『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』生活書院。
Ishino, Sachiko and Wakabayashi, Naeko (1996), "Japan," Rosenbloom, Rachel (ed.), *Unspoken Rules: Sexual Orientation and Women's Human Rights*, London: Cassell, 95-101.
岩田由美（1976）「私の中のリブへの芽生え」『すばらしい女たち』34-35。
神楽じゃむ（2009）「女の運動とレズビアニズムと」杉浦郁子編『日本のレズビアン・コミュニティ：口述の運動史』66-84。
かわはら狩戸（1976）「どこまで行こう」『すばらしい女たち』52-56。
木野みどり（1978）「Woman Loving Women」『あんなあへ』5。溝口明代・佐伯洋子・三木草子編（1995）『資料日本ウーマン・リブ史（3）』松香堂書店、381-382に収録。
清岡純子（1968）『女と女：レスビアンの世界』浪速書房。
清岡純子（1971）『レスビアンラブ入門：心に愛を唇に乳房を』池田書店。
リブ新宿センター資料保存会（2008）『この道ひとすじ：リブ新宿センター資料集成』インパクト出版会。
まいにち大工（1978a）『ザ・ダイク』創刊号。
まいにち大工（1978b）『ザ・ダイク』第2号。
まいにち大工（1978c）「グループ紹介：まいにち大工」『あごら』18: 142-143。
まいにち大工（1978d）「まいにち大工アピール」『女・エロス』11: 164。
McLelland, Mark (2004), "From Sailor-Suits to Sadists: 'Lesbos Love' as Reflected in Japan's Postwar 'Perverse Press'" *U.S.-Japan Women's Journal*, 27: 3-26.
溝口明代・佐伯洋子・三木草子編（1995）『資料日本ウーマン・リブ史（3）』松香堂書店。
奈良林祥（1967）『レズビアン・ラブ』（シリーズ名　Q collections）コダマプレス。
西村光子（2006）『女たちの共同体：70年代ウーマンリブを再読する』社会評論社。
岡崎克彦（1969）『禁男の幻影：レズビアン・ラブ』勁文社。
織田道子（1978）「闘う女たちへ」『ザ・ダイク』1: 3。
大江千束・溝口彰子・池田久美子「座談会　レズビアンコミュニティの現状（上）（下）：『生活者』として活動を継続する次代に」『オンラインマガジン　セクシュアル サイエンス』2003年12月号、2004年1月号。
http://www.medical-tribune.co.jp/ss/2003-12/ss0312-3.htm
http://www.medical-tribune.co.jp/ss/2004- 1 /ss0401-1.htm
Reich, Wilhelm (1930), Die Sexualität im Kulturkampf. W. ライヒ（1969）『性と文化の革命』中尾ハジメ訳、勁草書房。
沢部ひとみ（2009）「『女を愛する女たち』をめぐる表現活動」杉浦郁子編『日本のレズビアン・コミュニティ：口述の運動史』38-65。
Sawabe, Hitomi (2008), "History of lesbian activism and publications in Japan," Summerhawk, Barbara and Hughes, Kimberly (ed.), *Sparkling Rain: And Other Fiction from Japan of Women Who Love Women*, Chicago: New Victoria Publishers, 6-32.

芝風美子（1993）「エッセイ　60年代レズビアンブーム：あの頃、レズはオッシャレーだった」柿沼瑛子・栗原知代編著『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』白夜書房、290-291。
芝風美子（1997）「眠れぬ夜のために　第1回　がんばれ！　レディス・バー」『anise』5号（1997年7月号）、110-111。
「すばらしい女たち」編集グループ（1976a）『すばらしい女たち』創刊号。
「すばらしい女たち」編集グループ（1976b）『すばらしい女たち別冊：〈レスビアンに関するアンケート〉集計とレポート』。
杉原恵美子（1970）『女と女のブルース』第二書房。
杉浦郁子（2005a）「日本におけるレズビアン・スタディーズの課題」『2004年中央大学社会科学研究所シンポジウム記録集「日本におけるセクシュアル・マイノリティ・スタディーズ」：戦後日本〈トランスジェンダー〉社会史 VIII』中央大学社会科学研究所「セクシュアリティの歴史と現在」研究チーム・戦後日本〈トランスジェンダー〉社会史研究会（編集・発行）、12-20。
杉浦郁子（2005b）「一般雑誌における『レズビアン』の表象：戦後から1971年まで」『現代風俗学研究』11: 1-12。
杉浦郁子（2006）「1970、80年代の一般雑誌における『レズビアン』表象：レズビアンフェミニスト言説の登場まで」矢島正見編著『戦後日本女装・同性愛研究』中央大学出版部、491-518。
Sugiura, Ikuko (2006), "Lesbian Discourses in Mainstream Magazines of Post-War Japan: Is *Onabe* Distinct from *Rezubian*?" *Journal of Lesbian Studies*, Vol.10, No.3/4, 127-144.
Summerhawk, Barbara, McMahill, Cheiron and McDonald, Darren (eds.), (1998), *Queer Japan: Personal Stories of Japanese Lesbians, Gays, Bisexuals, and Transsexuals*, Norwich, VT: New Victoria.
田部井京子（1976）「わたしの歩いてきた道」『すばらしい女たち』44-48。
田部井京子（1978）「一・二八集会手前みそレポート」『ザ・ダイク』2: 12-13。
Taylor, Verta and Whitter, Nancy E. (1992), "Collective Identity in Social Movement Communities: Lesbian Feminist Mobilization," Morris, Aldon D. and Mueller, Carol McClurg (ed.), *Frontiers in Social Movement Theory*, New Haven and London: Yale University Press, 104-129.
Taylor, Verta and Rupp, Leila J. (1993), "Women's culture and Lesbian Feminist Activism: A Reconsideration of Cultural Feminism," *Signs*, 19: 32-61.
The Boston Women's Health Book Collective (1973), *Our Bodies, Ourselves: A Book by and for Women*, New York: Simon and Schuster. 秋山洋子・桑原和代・山田美津子訳編（1974）『女のからだ：性と愛の真実』合同出版。「からだ・私たち自身」日本語版翻訳グループ訳（1988）『からだ・私たち自身』松香堂書店。
富岡明美（1996）「訳者解説」リリアン・フェダマン／富岡明美・原美奈子訳『レスビアンの歴史』筑摩書房、384-393。
富岡明美（1997）「レズビアン・フェミニズム：現在の状況からその歴史的背景・理論展開を振り返る」江原由美子・金井淑子編『ワードマップ　フェミニズム』新曜社、61-88。
敦賀美奈子（1995）「『れ組スタジオ・東京』での8年間」『imago』6 (12): 46-51。
Tuttle, Lisa (1986), *Encyclopedia of Feminism*, Harlow: Longman. 渡辺和子監訳（1991）『フェミニズム事典』明石書店。

若林苗子（2009）「女のネットワークのなかで生きる」杉浦郁子編『日本のレズビアン・コミュニティ：口述の運動史』17-37。
渡辺みえこ（1990）「日本における女性同性愛の流れ：あとがきにかえて」渡辺みえこ他訳『ウーマンラヴィング』現代書館、184-189。
吉廣紀代子（1973）「アメリカのリブの新しい波」『女・エロス』1：106-111。
「東京同性愛地帯のインテリ女性たち：バラ十字会のメンバー２人の告白から」『週刊現代』1963年８月１日号、86-89。
「全国40マンの諸嬢よ‖『レズ友の会』会長23歳のこの恍惚」『週刊大衆』1972年11月30日号、142-144。
「『SEX 開拓者』を自負する女のメニュー：レズの全国組織化を狙う23歳の設計図」『週刊サンケイ』1972年12月１日号、132-135。
「1971-2001年表とインタビューで振り返るコミュニティの歴史」『レズビアン＆バイセクシュアルのための雑誌　anise（第２期）』2001年夏号、28-78。

すぎうら　いくこ（中央大学他非常勤講師）